

書評

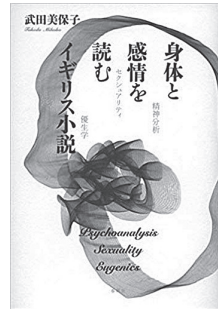
武田美保子著

『身体と感情を読むイギリス小説』

——精神分析、セクシュアリティ、優生学』

(春風社、2018)

土屋 結城



本書は、題名にある通り、イギリス小説の読解を通して「従来外的だとみなされてきた身体と、内的だとみなされてきた感情や意識が、実は互いに区分不能であり、両者は、これまで考えられてきたよりも、はるかに複雑に関係し合っていることを、文学表現のなかで検証する試み」であり (p. 15)、その検証を通して「いかにイギリス小説が『身体』が語る声に耳を傾けてきたか、『身体』の問題や身体イメージが、いかに深くイギリス文化の根幹にかかわっているかを明らかにする」ことが狙いとされている (p. 20)。

著者の「身体」への関心は、2003年出版の著書『〈新しい女〉の系譜——ジェンダーの言説と表象』に既に見て取れる。この著書に収録されている『余計な女たち』論において、著者はエレヌ・シクスーを引用しながら、「ヒステリー患者はまさしく、言葉によって語り得ない欲望を『身体が語る存在』」であると論じている (『〈新しい女〉の系譜』p. 100)。言葉によって語り得ないものを、身体表現——本書の言葉を用いれば「身体が発する信号」や「無意識が語る言葉」(p. 20)——から読み解くという方法論は、本書でも共有されている。なぜならそれは、著者の言葉によるならば、「現実を変革する可能性の、萌芽ともなりうるに違いない」からである (p. 20)。

このような問題意識に基づく本書は、おおよそ分析の対象となる小説の出版時代順に「ヒステリー症」「荒野と都市」「モダニズム小説」「欲動」の四部から成り、それぞれの部は二つの章から成り立っている。第1部第1章『『ダニエル・デロンダ』のねじれ——「顔」が暴く豊穡なる亀裂』では、『ダニエル・デロンダ』における「顔」の表象やグェンドリンのヒステリー症に

注目しながら、グェンドリンとデロンダ二人の情動、感情の転移を読み解く。第2章「ギッシング小説におけるジェンダー化する身体への抵抗——反流行文士とヒステリー症」では、ジュディス・バトラーの「呼びかけ」をめぐる議論に依拠しながら、ジョージ・ギッシングの『三文文士』と『渦』を分析し、それらの作品における登場人物たちの性的アイデンティティが「呼びかけ」を通じて社会的に構築されているものであることを指摘している。

第2部第3章「耳と目から読む『帰郷』——歌劇の舞台としての荒野」では、トマス・ハーディ作『帰郷』を、聴覚と視覚に注目しながら読み、小説が歌劇のように呈示されていると結論づけている。第4章「『ジキル博士とハイド氏』の優生学的身体——人格と都市」では、ロンドンがまるで生き物のように描かれることにより、主人公の二重性と連動しているようであることが論じられている。

第3部第5章「『ダロウェイ夫人』の「ひきつり」——優生学言説と小説技法」では、ヴァージニア・ウルフのシャーロット・ブロンテ評に登場する「ひきつり」という語に注目し、その「ひきつり」が人物の内面の問題、さらには小説技法の問題とも関わっていることを検証している。第6章「越境する身体——『ユリシーズ』の民族、女性、書物」では、ダブリンが女性の身体や書物とメタフォリカルに重ね合わされる過程を丹念に読み、その重層性が次第に正の符牒を帯びていく様を分析している。

第4部第7章「『モーリス』の内なるホモフォビア——精神と身体の均衡に向けて」では、E・M・フォスターが精神と身体とを「結び合わせる」試みを、モーリスの欲望との苦闘のうちに読み取っている。第8章「『赤ずきん』物語と身体性——『狼たちの仲間』と内なる『狼』」では、アンジェラ・カーター作『血染めの部屋』所収の「赤ずきん」三部作において、カーターがいかに女性の身体やセクシュアリティの問題と向き合っているかを読み解いている。

これらの章の中で、著者が序章で言及していた「身体が発する信号」や「無意識が語る言葉」の問題が前景化しているのが『ダニエル・デロンダ』におけるヒステリー症に注目した第1部第1章、及び『ダロウェイ夫人』の身体表象に注目した第3部第5章ではないだろうか。第1部第1章の『ダニエル・デロンダ』の読解においては、グェンドリンのヒステリー症の発

作から「イギリスの国家的自己意識の内なる亀裂」が垣間見えると論じている (p. 42)。すなわち、彼女のヒステリーとは「男性社会の堅固な秩序」(p. 40)に閉塞させられ、「結婚における従属的位置に抵抗」(p. 41)しつつも、「そのすべての試みに失敗しその欲望は挫かれて」(pp. 41-2)しまった結果、発症するものなのだとということである。しかし、著者はこの内なる亀裂を「豊穡なる裂け目とでも呼ばれるべきものなのである」(p. 42)とし、丹念に掬い上げている。

そして、実際にこの章の最後で、『ダニエル・デロンダ』とカズオ・イシグロ作『わたしを離さないで』の間テキスト性を検証することによって、著者自身がその「豊穡」さを示していると言えよう。『わたしを離さないで』では、語り手のキャシーが『ダニエル・デロンダ』を読んでいるときに、親友(であるはず)のルースがそのあらすじを説明し始めたことから、二人の諍いが始まる。しかし、二人の諍いにはトミーという男性も深く関わっている。この「愛憎ないまぜの錯綜した三角関係の中で展開される心理戦」(p.45)がグェンドリン、デロンダ、グランドコート、マイラの複雑な関係と重層的に絡み合う。つまり、両作品ともに「ヒステリー」や「怒り」の表象といった、あらすじ——ルースが語ろうとしたもの——からこぼれ落ちるものの表象が鍵となることを著者自らが示しているのだ。

『ダロウェイ夫人』を分析した第3部第5章では、ウルフが“A Room of One’s Own”において言及した、ブロンテの小説に存在する「ひきつり、つまり、あの激怒」という言葉を鍵に読解を進める。ブロンテの小説においては、この「ひきつり」は「女性としての彼女が家父長制社会から受ける抑圧への苦悩と怒り」(p. 134)と解される。そして著者はその「ひきつり」は「やはりウルフ自身にも振り向けられるのではないかと考えずにはいられない」(p. 134)と述べ、『ダロウェイ夫人』において「ひきつり」が見られるのかどうか、そして、見られるとしたら、それは何を表象、象徴しているのかを考察する。その際にやはり重要となるのは身体表現、特に本作においては「痛み」である。クラリッサがミス・キルマンに抱く憎悪が「背骨が削られるような」痛みという身体的症状としても知覚されている点、サリーにキスされた際にピーターが割り込んできたときに感じる「暗闇の中でみかげ石の壁に鼻をぶつけた感じ」から、著者はクラリッサが同性の相

手に抱くアンビヴァレントな欲望の存在を指摘する。

さらに、この身体表現に注目することで、ロンドンに「飛び出す (plunge)」クラリッサと家の窓から「飛び降りる (plunge)」セプティマスの「類似と差異」(p. 145) がよりクリアになる。ブラッドショー令夫人の「神経質そうな身体の痙攣」「ごちない手の動き」「足のよろめき」「精神の動揺」といった身体の症状からは「彼女自身のその偽りの暮らしは、ひそかに彼女の身体を蝕んで」(p. 150) いたことが明らかにされ、クラリッサとセプティマスのみならず、クラリッサとブラッドショー令夫人との「類似と差異」が明るみに出される。そしてこれらの「類似と差異」と響き合うように、この章は、ウルフとブロンテの相違を論じて終わる。著者の結論、「自らのテキスト身体の痙攣を止めることも防ぐこともできなかったにせよ、少なくともウルフ自身は、その身体症状に気づいていたのではないかと思われるのである」(pp. 151-2) という指摘は、ウルフが否定的に論じた「ひきつり」に注目して『ダロウェイ夫人』の読解を進めてきたこの章を見事にまとめている。

本書において、上記の身体表現の分析の他に見逃せないのが、アダプテーションに関する議論である。著者は、『フランケンシュタイン』の翻案小説を論じた論文において、「アダプテーションは、元テキストから限りなく増殖していくものであると同時に、元テキスト内の、これまで気づかなくてきた要素に光を当てることにより、新たな解釈の可能性を与える助けとなってくれる」ものであり、それゆえに、アダプテーション研究は「すぐれて元テキストを新たに読み直し、解釈し直す行為でもある」(『フランケンシュタイン翻案小説の系譜』pp. 258-9) と論じているが、その言葉通り、本書でも随所にアダプテーションへの目配りがなされている。中でもある程度まとまって論じられているのが、ニール・ジョーダンによる「赤ずきん」三部作のアダプテーション映画『狼の血族』についてであろう。特に、映画が小説とは異なるエンディングを迎えることから、カーター作品の特徴であるメタフィクション性に改めて思いをめぐらす点は、まさに「元テキストを新たに読み直し」す行為の表れである。

本書は以上のように身体表象を中心とする論文集だが、著者の問題意識が多様な範囲にわたっているがゆえに、議論が拡散していく印象は否めな

い。上述したように、序章で提示されている問題意識が最も顕著に表れているのは第1章と第5章であろうが、他の章では、第3章のように、知覚行為に焦点をあてているものもあれば、第4章や第6章のように都市が身体メタファーで語られていると論じるものもある。また第4章におけるエマ・テナントによる『ジキル博士とハイド氏』の翻案小説の読解、第7章における『モーリス』のアダプテーション論、さらに言えば、注で言及されるにとどまった『忘れられた巨人』における身体と無意識の問題は、それだけでも興味深いものであるがゆえに、もっと紙幅を取って議論が展開されても良かったのではないかという思いも残る。しかし、このような議論の拡散は著者の多岐に渡る研究活動ゆえのことであり、読者としては、自身で研究を進めていく上でのヒントを多く得られるということでもある。著者の研究に対する妥協なき姿勢から学ぶことの多い書であると言えよう。

引用文献

武田美保子『〈新しい女〉の系譜——ジェンダーの言説と表象』彩流社、2003年。
——。「フランケンシュタイン翻案小説の系譜——SFからポストモダンへ」武田悠一・武田美保子編著『増殖するフランケンシュタイン——批評とアダプテーション』彩流社、2017年、pp. 233-264。

——実践女子大学准教授